

国 語

「現代の国語，言語文化」

下記 3 学科の**選択**受験科目

マネジメント工学科

環境安全工学科

創生デザイン学科

現代の国語, 言語文化

〔二〕 次の問い（問一～問五）に答えなさい。

問一 次の（１）・（２）の熟語や故事成語の説明としてもっとも適切なものを、それぞれ次の①～

④の中から一つずつ選び、解答記入欄

1

 ・

2

 にマークしなさい。

（１） 潮時

- ① ちょうどよい時期
- ② 調子がよい時期
- ③ やる気が起きない時期
- ④ あきらめる時期

（２） 木で鼻を括くくる

- ① 得意げになっている様子のこと
- ② なすべがない様子のこと
- ③ おごり高ぶって無礼な態度のこと
- ④ 無愛想でそっけない態度のこと

問二 次の四字熟語の空欄にあてはまるものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄

3

 にマークしなさい。

無為無

--

- ① 索
- ② 柵
- ③ 作
- ④ 策

現代の国語，言語文化

問三 次の(1)・(2)の説明にあてはまるものを、それぞれ次の①～④の中から一つずつ選び、解答記入欄 4 5 にマークしなさい。

(1) かねて希望していたとおりであること

- ① 鳴り物入り
- ② 誂え向き あつち
- ③ 恵みの雨
- ④ 地獄に仏

(2) 朝廷や武家の礼式などに関する古来のきまり

- ① 常住不斷
- ② 旧態依然
- ③ 有職故実
- ④ 古色蒼然 そうぜん

問四 類義語の組み合わせとしてもつとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 6 にマークしなさい。

- ① 措定 — 措置
- ② 沿革 — 歴史
- ③ 概念 — 具象
- ④ 認識 — 実証

現代の国語，言語文化

問五 次の(1)・(2)の語句の使い方としてもっとも適切なものを、それぞれ次の①～④の中から一つずつ選び、解答記入欄

7

 ・

8

 にマークしなさい。

(1) なし崩し

- ① 議論は進まず、なし崩しに終わった。
- ② その事件は、なし崩しに時効を迎えた。
- ③ 当初の計画を、なし崩しに変更する。
- ④ 大雨の影響で、なし崩しに土砂災害が起きた。

(2) 不文律

- ① わが家では、ごみ出しは自分ですという不文律がある。
- ② プロジェクトの参加について、学歴は不文律としている。
- ③ 寄付は不文律であるが、誰もが寄付をおこなった。
- ④ この日程では不文律なので、計画を練り直す。

現代の国語、言語文化

〔二〕次の問い（問一～問二）に答えなさい。

問一 次の問題文（１）～（３）について、文意に照らして正しいものを、それぞれ次の①～④の中から一つずつ選び、解答記入欄

 ～

 にマークしなさい。

（１）約五六〇〇万年前に起きたとされる、地球上の温度が４～５度上昇した「温暖化極大期」とよばれる時期は、地球軌道の変動が引き金となって、約六〇〇〇年間続いた。

① 地球の温度は温暖化極大期に大きく変化し、その約六〇〇〇年後まで上昇し続けた。
② 約六〇〇〇年の間、地球の軌道が変動していたため、日射量が増えて温度が上昇した。

③ 地球の軌道は、約五六〇〇万年前に起きたとされる大規模な温暖化によって変動した。
④ 温暖化極大期において、約六〇〇〇年もの間、気温が４～５度上昇した状態が続いた。

（２）土星の衛星には表面を覆う氷の下に液体の水が存在し、その中に地球型生命に欠かせないリン酸が高濃度で含まれることが判明したため、生命が存在する可能性が増した。

① 土星の衛星を覆っている氷は、高濃度のリン酸を含有している。
② リン酸の濃度は地球と同程度であるため、土星の衛星に生命が存在すると推測される。
③ 土星の衛星には液体の水と高濃度のリン酸があるので、生命が存在するかもしれない。
④ 土星の衛星に存在する生命は、すべて氷に閉じ込められている。

現代の国語、言語文化

(3) 山火事の灰は風に乗って長い距離を飛散する。この灰の中には発がん性重金属が危険な濃度で含まれており、特に乾燥した環境では、継続的な粉塵ふんじんの発生と風による飛散のために、長期的な吸入による健康被害をもたらす恐れがある。

11

- ① 乾燥した地域では山火事の灰が長期にわたって飛散し吸入されるため、地域住民の健康が損なわれている。
- ② 山火事の灰が風に乗って広がるため、火災現場周辺だけでなく遠方の地域にも同様にその影響が及ぶ。
- ③ 発がん性重金属を含んでいる山火事の灰は、継続的に拡散されるが湿潤な環境では健康被害をもたらさない。
- ④ 乾燥した環境では、山火事の灰が飛散することによって生じる健康被害が occur 可能性がある。

現代の国語、言語文化

問二 次の問題文を読んで、後の問い(1)～(3)に答えなさい。

低温の空気が肌に当たると「冷え」を感じる。ただ、同じ温度刺激を与え続けていると、人はすぐにその状態に慣れてしまい、冷えを感じなくなる。

冷感を継続するには、当てる空気の温度を下げ続けていく必要があるが、冷やしすぎることは体によくない。

研究員たちは「皮膚の温度を実質的に一定に保ちつつ、冷たいという感覚だけをつくり出そう」と考えた。

ヒントとなったのは、これまでに明らかになってきた「人は素早い温度変化を敏感に察知する。それも、温感よりも冷感をより受けとめやすい」という特徴だった。

つくったのは、冷気のふき出し口と、温刺激のためのLED光源を組み合わせた装置。圧縮空気から分離させた冷たい空気を皮膚に当て続ける一方、LEDの光をつけたり消したりを繰り返す。

狙ったのは、「冷たい」と感じる程度まで冷気を当てて皮膚温度を素早く下げたうえで、LEDで温めること。温感も冷感よりも鈍いので、「温かい」と感じる手前のタイミングで皮膚温度をもとに戻し、「冷たい」という感覚だけを持ち続けてもらうことができるはずだ。

大学院生ら15人に協力してもらい、冷刺激と温刺激のバランスを探った。その結果、「0・3秒間かけて0・06度冷却し、2・7秒間かけて0・06度温める」などのサイクルを繰り返したとき、皮膚温度を長期的には一定に保ちつつ、「冷たい」と感じ続けたという。

「視覚のVRと組み合わせ、オーロラ観光気分をリアルに楽しめる装置がつかれるかも」と研究員は話す。さらに研究が進めば、夏にエアコンの設定温度をより高くしつつ、VR効果で涼しく過ごせるようになる可能性もあるという。

二〇二四年一月二日『朝日新聞デジタル』より

※問題作成の都合上、文章の一部を改変した

朝日新聞社に無断で転載することを禁じる

承諾番号：25-1800

現代の国語、言語文化

(1) 問題文において主旨を展開する前提となっていることを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 12 にマークしなさい。

- ① 人は低温を察知すると冷えを感じるが、同じ温度刺激を与え続けると冷感が弱まる。
- ② 体を冷やしすぎることなく、冷たいという感覚だけをつくり出すことは難しい。
- ③ 冷感を保つには空気を一定の温度に下げることがあるが、冷やしすぎは体によくない。
- ④ 人には、素早い温度変化を敏感に感じとり、温感よりも冷感を強く感じる特徴がある。

(2) 問題文の結論を導く根拠として正しいものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 13 にマークしなさい。

- ① 実験では、0・3秒間の冷却と2・7秒間の加熱を含んだ皮膚刺激を続けると、皮膚を継続して温めつつ冷感を保てると分かった。
- ② 物理的な冷気のふき出し口と温刺激のためのLED光源を組み合わせた装置をつくることで、冷感を持続させる効果が実証された。
- ③ 冷感を受けとめやすい特徴を利用した装置を用いると、LEDの光を照射しても皮膚温度を上げずに「冷たい」という感覚を継続させることができる。
- ④ 冷気を当てて皮膚温度を下げた後に温めることを断続的に繰り返すことが、皮膚温度を一定に維持するために効果的だと判明した。

(3) 問題文の結論として正しいものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 14 にマークしなさい。

- ① 冷却と加熱のバランスを調整し、より強く冷感を刺激することのできるサイクルが発見された。
- ② 開発された装置の研究が進めば、エアコンの設定温度が高くても涼しく過ごせるようになる。
- ③ 皮膚の温度を実質的に一定に保ったまま、「冷たい」と感じ続けることのできる装置が開発された。
- ④ 視覚のVRに研究結果を組み合わせると、リアルな観光体験が可能になると予想されている。

現代の国語、言語文化

(三) 次の問題文を読んで、後の問い(問一～問十二)に答えなさい。

しばしば直接的・身体的に相手が現前しない討論の場でこそ、非合理的態度が生まれやすい。というのも、顔と顔を合わせた対話における非合理的態度は、あまりにも幼稚に見えてしまうからである。強情で頑固な態度は、人々の面前で行われたときには、一種の軽蔑をもつて受け取られる。

自分の顔と身体が隠される場においてこそ、非合理的態度と発言が横行する。インターネット社会は非合理を生み出すオン・ショウを備えている。

^A 相手を面前にした対話の場面では、非合理的態度は取りにくい。血肉で出来た、こちらに語りかけてくる他者に対して、その発言をまるで聞かず、無視し続けることは難しい。私たちは他者に応答するように作られている。^B 非合理的人が取る態度は、対話に背を向けることである。話し合うことを拒否すること、議論に参加しないことである。したがって、「X」ということは、「どの人にも対話に参加してもらうにはどうしたらよいか」という問題である。

では、対話の席につかない人には、どのようにすれば座ってもらえるのだろうか。

対話を拒否する人は、自分を変えることを拒否している。会議の場で一方的に話し続ける人も、やはり対話を拒否している。それは聴くことの拒否だと言ってよい。話しても自分は変わらない。相手の話を聞き、相手の自分への応答を聞いたときに、私たちは変わらざるを得ない。

^C 誰も完全に合理的になることはできない。私たちは誰でも幾ばくかは非合理的である。他人の非合理的な行為を笑う権利など、誰ももってはいない。私たちの人生には限りがある。あらゆることを経験することなどできないし、あらゆる知識を吸収することはできない。出会える人には限りがあるし、そもそも私たちの社会はあらゆる人の声を届けてはいない。

P、人間の取りうるあらゆる観点を自分のうちに取得するなど不可能である。何かに執着し、何かに偏った考え方を持ち、特定の物事に特別の愛着を感じるのは、人間的な必然である。愛することは何かを、誰かを、偏って好むことである。それは何かに執着することであり、そこに「中心化」することである。その意味で愛は非合理だとも言える。タバコを吸い続けるのは健康に良くない。

Q 他者の健康を害さない限り、その非合理的な態度はそれほど強く責められない。同じ程度に愚かなことを、誰しもが行っているからである。私たちは愚行をする権利を持っているとさえ言えるのだ。

^D だから、私たちは、他者の声に耳を傾けようとする。私たちは他者の話を聞くときには、自分の意見の不十分さ、^E イタラなさ、偏りを自覚している。自分たちが完全に合理的でありうると信じていることは、かえって非合理であり、狂気ですらある。したがって、合理的であるということは、自分が非合理的な存在であることを認めることに存する。人間は完全な合理性を手に入れることは原理的にできない。であるなら、なおさら、自分は非合理のままにとどまり、自分の経験や意見が偏ったものであり、他者から相対化され、ときに修正を加えられるべきことを認めるべきである。合理的な人間は、自らの人生がごく短く、有限であるどころかほとんど無に等しい、実に小さな存在であ

現代の国語、言語文化

ることを認め、他者も同じ資格で存在していることを認める。

非合理性とは、最終的に、この事実を拒否することから生じている。それは、自分がどこまでも変わらないままで存続していたいという願望の裏返しでもある。それは、死を身近に感じたときに生じやすい願望であろう。

心理学者のソロモンたちによれば、人々が保守化し、感情的な政治的選択を行ってしまう最大の心理的要因は自尊心^Fの喪失であるという。自尊心を持つとは、単に自分に自信があるといったことではない。それは、自分が属している文化と社会の評価枠組みに信頼を置くことができ、そのなかで自分は有意義な役割を果たせていると信じている状態のことである。ソロモンは、自尊心は死の恐怖を和らげてくれるものであり、死の恐怖を回避した者は他者に寛容になれるという。

自尊心は、単純に誰かから褒められたり評価されたりすることで生まれるのではない。そうではなく、自分が有している評価の枠組み自体が信頼できるかどうかが問題なのである。自尊心が失われるのも、自分の行為に対する評価ではなく、その評価の枠組みが他者からまったく認められないときなのである。ソロモンたちによれば、自尊心が失われる原因は主に三つあるという。ひとつは、個人または集団が自分たちの文化的世界観に対する信頼を失うときである。もうひとつは、自分が、その文化的世界観の成り立ちの重要な要素だと思えないときである。第三に、平均的な市民が達成できない価値基準を文化が推し進めるときにも自尊心は低落するという。非合理的態度をとる人に、見事に当てはまる特徴ではないだろうか。

非合理的行動の理由が、以上のように最終的に自尊心の低減と、それから自分を守るための現実からの退却であり、より広い集団への参加の拒否であるとするならば、そうした人たちを対話の席についてもらうためにすべきことは、その人たちの尊重にあるだろう。

ソクラテスは、アテネの街で若者やソフィストに議論を吹っかけ、対話を通して彼らが知識と呼んでいるものをさまざまに吟味し、彼らが真の知識に^Gトウタツ^Hしていないことを示した。そしてソクラテス自身は、無知な人間であることを自覚しているという一点でのみ知者と言えるのだと考えていた。どうだろうか。このソフィストとソクラテスの対比は、これまで論じてきた非合理的な人間と合理的な人間の違いに相当していないだろうか。合理的な人間は、己が不完全で、限定されたまったく小さな存在でしかないことを認め、己の非合理性を認めている。非合理的な人間は、自分の知識の正しさを信じ、己の卓越を信じ、他者にその自分の知識を高めから与えようとしていた。おそらくこの違いは、死を前にしたときの態度の違いからきている。

河野哲也「人は語り続けるとき、考えていない 対話と思考の哲学」より

* ソフィスト＝知識や技能（特に弁論術）を教えることで報酬を得ていた人たち。

※問題作成の都合上、文章の一部を改変した

現代の国語、言語文化

問一 二重傍線部(ア)～(ウ)の漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の①～④の中から一つずつ選び、解答記入欄 15 17 にマークしなさい。

(ア) オンシヨウ

- | | |
|---|--------------|
| ① | リンシヨウ医を志す |
| ② | タイシヨウ療法をほどこす |
| ③ | 友人をシヨウタイする |
| ④ | 稲作のハッシヨウ地 |

(イ) イタラなさ

- | | |
|---|------------|
| ① | シヨシを貫徹する |
| ② | 課題をヒッシにこなす |
| ③ | クラスのシキを高める |
| ④ | シゴク当然の反応 |

(ウ) トウタツ

- | | |
|---|--------------|
| ① | 批判がサットウする |
| ② | アットウ的な強さ |
| ③ | ジュントウな結果 |
| ④ | 日本アルプスをトウハする |

問二 傍線部A「相手を面前にした対話の場面では、非合理的態度は取りにくい」とあるが、それはなぜか。その理由として誤っているものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 18 にマークしなさい。

- ① そもそも私たちは、他者の語りかけに対して応答するようにできているから。
- ② 血肉でできた他者に対し、顔と身体を隠そうとする態度は幼稚に見えてしまうから。
- ③ 実際に対面している相手の発言に対し、それを無視し続けることは難しいから。
- ④ 面前の相手を無視していると、周囲から冷ややかな目で見られかねないから。

現代の国語、言語文化

問三

傍線部B「非合理的人が取る態度は、対話に背を向けることである」とあるが、このような人はなぜ「対話に背を向ける」のか。その理由としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 19 にマークしなさい。

- ① 自分を変えずにいるためには、他者に軽蔑されても仕方がないと考えているから。
- ② 相手の話を聞くことで、自分が変わらざるを得なくなること拒否したいから。
- ③ 一方的に話し続けることは、相手の話を聴くのを拒否するのと同じことだから。
- ④ 対話に参加しないほうが、自分の意見を周りの人に認めさせやすくなるから。

問四

空欄 X に入る語句としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 20 にマークしなさい。

- ① 非合理を生み出さない対話とはどのようなものか
- ② 非合理的な人とも対話を行うべきなのか
- ③ 非合理的対話をどのようにさけるか
- ④ 非合理的な人々に対してどうすればよいか

問五

傍線部C「誰も完全に合理的になることはできない」とあるが、それはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 21 にマークしなさい。

- ① あらゆる考え方を取得することのできない私たちが、愚かな人や愚かな行為を愛してしまふのは必然だから。
- ② 経験や知識に限りのある私たちは、特定の誰かや何かを愛するだけでなく、それらに執着してしまうから。
- ③ 経験や知識に限界がある限り、私たちがとるどのような行為も結局は愚行であるとみなすことができるから。
- ④ あらゆる観点を考慮することが不可能な私たちは、誰もが何らかの不合理な偏りを持っていると言えるから。

現代の国語、言語文化

問六

空欄

P

Q

に入る語句の組み合わせとしてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 22 にマークしなさい。

- ① P したがって Q つまり
- ② P とはいえ Q にもかかわらず
- ③ P だから Q しかし
- ④ P そのうえ Q もっとも

問七

傍線部D

「私たちは、他者の声に耳を傾けようとする」とあるが、それはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 23 にマークしなさい。

- ① 自らをその経験や意見に偏りのある非合理的存在であると認め、自分の意見を他者の声によって変えていくべきであると考えているから。
- ② 人間はみな非合理性や狂気を持たざるを得ない存在であり、他者から相対化され、また修正を加えられるべき存在であると認めているから。
- ③ 自分を愚かなことを行う不合理な存在であると考えただけでなく、他者もまた限りある存在として不合理な存在であると認めているから。
- ④ 個人としては不合理な私たちが完全に合理的な意見を手に入れるためには、お互いの意見を修正し合っていく必要があると考えているから。

問八

傍線部E

「この事実」とあるが、それはどのような事実か。もっとも適切なものを、次の①

～④の中から一つ選び、解答記入欄 24 にマークしなさい。

- ① 他者も自分と同様に、実に小さな存在であるという事実。
- ② 自分が有限で、無に近いほど小さな存在であるという事実。
- ③ 完全な合理性を手に入れることは絶対にできないという事実。
- ④ 他者と同様に、自分の経験や意見には偏りがあるという事実。

現代の国語、言語文化

問九 傍線部F「自尊心」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) ここで述べられている「自尊心」に関する説明としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 25 にマークしなさい。

- ① 自尊心は、合理的な評価枠組みのなかで有意義な役割を果たせたと感じたときに生じる。
- ② 自尊心が高い人は、自分に対する他者の評価に左右されずに行動することができる。
- ③ 自分が属する社会の価値基準を満たしている人ほど、政治的に保守的な傾向を持つ。
- ④ 信頼できる評価枠組みのなかで価値ある働きをしていると思うとき、自尊心は向上する。

(2) なぜここで「自尊心」の話を取り上げたのか。その理由としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 26 にマークしなさい。

- ① 自分が非合理的な存在であると認めることは、自尊心の低下を招く危険性を伴うと考えているから。
- ② 他者から褒められたり評価されたりすることが多い人ほど、合理的な態度を取れると考えているから。
- ③ 非合理的な人に対話に参加してもらうには、その人の自尊心を高める必要があると考えているから。
- ④ 非合理的な人が対話の席につかないのは、社会の評価枠組み自体を見直す必要があると考えているから。

問十 傍線部G「ソクラテス」とあるが、問題文ではソクラテスについてどのように述べられているか。もっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 27 にマークしなさい。

- ① 自身の知識が不完全であることを認めていた点で、合理的な人間であったと言える。
- ② 自らの無知を自覚することが、合理的であるために不可欠だと考えていたと言える。
- ③ 真の知識は他者との対話から得られると見抜いていた点で、知者であったと言える。
- ④ 己の知識の正しさを信じている人ほど、むしろ無知な人間だと考えていたと言える。

現代の国語、言語文化

問十一 傍線部H「死を前にしたときの態度の違い」とあるが、それはどのような「違い」か。もつとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 28 にマークしなさい。

- ① 死の恐怖に直面したときに、他者の意見に対して寛容な態度をとるのか、強情で頑固な、したがって非合理的な態度をとるのかの違い。
- ② 死の恐怖に直面したときに、己が不完全かつ有限で小さな存在であると認めるのか、己の知識の正しさと卓越を信じるのかの違い。
- ③ 死を身近に感じたときに、その恐怖から自身の存続を願うのか、自分が小さな存在であることを認めてその死を受け入れるのかの違い。
- ④ 死を身近に感じたときに、自分の社会の評価枠組みや文化的世界観への信頼を維持し続けることができるのか、それを失うのかの違い。

問十二 問題文の内容に合致するものを、次の①～⑥の中から二つ選び、解答記入欄 29 30 にマークしなさい。

- ① 相手の話を聴いて自分を変えるためには、インターネットを介さず、顔と顔を合わせて対話を行う必要がある。
- ② より多くの人と出会い、その人たちの話を聴く機会を得ることで、私たちはより合理的になれると言える。
- ③ 誰かを愛することは人間的必然であるため、それが他者を害する結果を生んでも非難することは難しい。
- ④ 自分が属する文化の評価枠組みを信頼し、自尊心を持つことは、死の恐怖を回避することへとつながる。
- ⑤ 社会がその市民に求める価値基準があまりに低すぎると、非合理的態度を取る人が増え、てしまうと言える。
- ⑥ ソクラテスは次々と相手の無知を暴いて議論に勝っていったので、アテネの人々から知者であると認められた。

現代の国語、言語文化

〔四〕次の問題文を読んで、後の問い（問一～問十二）に答えなさい。

自分のことから文章作法という文を書くのは、大変むづかしい。いったいどうやって自分は文章を書いているのだろう、と改めて考えてしまう。人にはそれぞれ自分の文章があるのだろうし、その上で個性の強い文、あまり個性的でない文というものがあるのだろう。書く人の気持の上でも自分だけの文を書こうとつとめる人があろうし、文章そのものを際立てたくない、とおもう人だってあるかもしれない。作家なら自分の文を持とうとするくらい当然ということになるが、しかしそれも力点のおき方は微妙にちがっているだろう。美文は書くまい、という態度は近代文学の常識だが、この常識にも深浅の差がある。私が^Bこういう前書きを書くのは、今になって自分はどうやって文章を書いているのだろうなどと云い出したことのおかしさを、はぐらかそうとするためではない。自分へ問いかけたことで、おのずと出てきたものである。だが、いささかはやはり私は、自分の文章作法というのを書くむづかしさで、はぐらかしをしているところもある。つまり私は、^Cさんばらに散らかした徹夜の私の仕事部屋を、開け放たねばならないとおもって、困っているのである。と云ったところで、私の文章そのものは、ひとに読んでもらいたいとおもって書いているものだし、すでに書いたものは、いくらかの人に読まれて、それなりに何らかの受けとり方もされている。私はもうそこですべてをさらしているのだ。私がひとつの何かを書き終えて、脚は遠い道を歩いたようにガクガクになり、何時間も口の中でしゃべりつづけたために^{*}頤のつけ根がなえてしまったなどと云ったところで、そこにある文章なり、または書かれたことがらが^{あざわ}嘲笑うかもしれない。

スタンダールのように、ドストエフスキーのように、豊富にあふれるように書けたらどんなにいいだろう、とそれは自分でもおもう。しかしそれは自分がスタンダールのようにドストエフスキーのように豊富でない、ということと不可能なのだ、とおもうしかない。それならチェホフのように深く澄んだものを書きたい、とおもったとしても、それもまた自分がチェホフのように深く澄んでいないということとそれも望み得ないことなのだ。自分がさらけ出されるだけなのである。^Dこれは私が云うまでもないことであろう。もつともスタンダールだのチェホフだのとおもってみても私など翻訳されたものを読むのだから、本当のものがどこまでわかっているのかそれは知らない。同じ作品が訳者のちがうことでちがった印象になるのを知っているから、その不安はたしかだ。ひとつの原文が、訳す人の性格によって、意味は同じであったとしても、ことばづかいの微妙なちがいで感じが変わってくる、ということをおもうと、^Eおそろしい気もしてくる。自分の書いたものにして、自分ではすべてをさらしている、とあきらめ、あるいは満足していても、どんなふうに受けとられているかは、本当はわかっていないのかもしれない。（中略）

いつか自分の作品が中学校で教材になって、ていねいに解説されるのを聞いたことがある。そのとき、^F書いた本人がびっくりした。もつともこれは小説としてのひとつの作品の読み方を中学生に

現代の国語、言語文化

わからせるための授業で、文章だけのことはなかった。が文章もおのずから取り上げられ、説明のうちにはここは作者がこういう意図でこの文章を入れている、ということもおしえられ、ああ、なるほどと、それを書いた本人がおどろいてうなずいた。構成にいたっては、まったく作者である私は、いいえそれほどの計算をしたわけではない、と、^(ア)キョウシユクする気持で訂正をしたいほどであった。

こういうふうに書く^Gと、書く人間を神秘的に祭り上げでもするように受けとられるかもしれない。ずいぶん昔、ある作家がこんなふうに云うのを聞いていたことがある。小説を書くとき自分は何を書いているのかわからないのだ。夢中で書いて、次の朝、目が覚めてみるとひとつの作品ができ上っているのだ、と。それを聞いてずいぶん^(イ)キミヨウなことをいう作家だ、とおもったのを覚えていた。そんなことがあるものか、と私はおもう。夢中で書いて、目が覚めたらひとつの作品ができ上っているなどということはありうるはずはない。こういうことを書く^ウ、というものがなくて、何かの文章が生じ、構成があるという、それは明らかにうそだとおもう。うそによる自己演出であろう。もう早く亡くなったある作家のことなのだが。

私だつて、最後までわかたてて書き出す。最後はわからぬままに書き出すという人もあるらしいけど、そういう書き方があるかもしれない。私は自分の作品の説明されるのを聞きながら本人がおどろきキョウシユクしたというけれど、文字どおりの夢中で書いたとはもちろんおもっていない。先きに云うように、こういうことを書きたい、というものがあつて、だから最後まで一応わかつて書き出す。そして書き出す文章というものは、第三者に自分の書きたいものがより正確に伝わるようにとねがつて書いてゆくだけである。おのずからの構成もめぐらす。くり返して云えば、そのとき、まず何かの方法を持つてというふうにはない、というのが私という人間をもあらわすことなのであろう。

豊富な、あるいは深みのある文章を書きたい、などとねがつて、そして自分を笑つたというのも先きに書いたが、文章が優先するなどということもないことだろう。文章が^(ウ)センパクなら、私自身の思考や、人間性に深みがないことなのである。だから、すべてはもはやさらしていると云わざるを得ない。ひとの文章を読めばそれがわかるから、自分のこともわかる。たしかに文章が優先するということはない。文章ばかり考えていても何も出てこない。何を書く^ウかとしているか、に思いを返したとき、文章が出てくる。それはたしかに云えることだけど、しかしまた、文章を書き直しているうちにおもっていること、考えていることに再発見なり、突っ込みを見いだすこともあることなのだ。書きながら考えるということとは、だれにでもある。書く^ウかとしているものはまず私にあるのだけれど、それをより鮮明にと書き直したり消したり書き加えたりしているうちに、はじめに書く^ウかとしているものに何かが加わつてゆくとき、自分の浅さにあわてたりする。それに気づくとき、果てはどこまで深いものがあるのかわからぬという不安が濃くなる。自分の書いたものですべてはもうさらしているという投げ出しは、この不安の表明である。自分の書く^ウかとおもうものに、

現代の国語，言語文化

取っ組み合ってゆくしかない。書こうとおもうものがすでに自分であり、その自分自身に取っ組んで、どういう結果をさらすのか、などと云えば、それもオオギヨウな不安の表明になるうか。しかしそれが、文章を書いてゆく張合いであるということもたしかである。

佐多稲子「わたしの文章作法」より

※問題作成の都合上、文章の一部を改変した

問一 二重傍線部(ア)～(エ)の漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の①～④の中から一つずつ選び、解答記入欄 31 ～ 34 にマークしなさい。

(ア) キヨウシユク

- ① フキヨウに強い会社
- ② クツキヨウな男たち
- ③ 世界キヨウコウに陥る
- ④ ソツキヨウで演奏する

(イ) キミヨウ

- ① プロジェクトをキカクする
- ② 敵にキシユウをかける
- ③ 親戚の家にキシユクする
- ④ キシヨウな資源を採掘する

(ウ) センパク

- ① コクハクな態度
- ② 主人公のドクハク
- ③ バンパクを開催する
- ④ キンパクした状況

(エ) オオギヨウ

- ① イギヨウを成し遂げる
- ② クギヨウの日々を乗り越える
- ③ 一点をギヨウシする
- ④ 意外な結果にギヨウテンする

現代の国語、言語文化

問二

傍線部A「美文は書くまい、という態度は近代文学の常識」とあるが、このような態度で小説を書く潮流の一つである自然主義文学の作品としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 **35** にマークしなさい。

- ① 島崎藤村の『破戒』
- ② 二葉亭四迷の『浮雲』
- ③ 森鷗外おうえいの『舞姫』
- ④ 谷崎潤一郎の『春琴抄』

問三

傍線部B「こういう前おき」とあるが、その説明としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 **36** にマークしなさい。

- ① 自分がどうやって文章を書いているのかについて、自分でもよくわかっていないこと。
- ② 作家なら自分だけの文を書こうとするのは当然で、それは自分も同じであること。
- ③ どのような文章を書いたり書こうとしたりしているかは、人によって異なること。
- ④ 文章は人によってそれぞれ異なるのが当然であり、そこに正解や不正解はないこと。

問四

傍線部C「さんばらに散らかした徹夜の私の仕事部屋」とは、この場合どのようなことを意味しているか。もっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 **37** にマークしなさい。

- ① 自分は昨日も寝ずに仕事をしていたため、自分の文章作法を今書こうと思っても頭が働かないという実情のこと。
- ② 自分の文章作法というものを書こうとしてもなかなか書けず、時間ばかりが過ぎていつているという実情のこと。
- ③ 自分は文章を書くことだけに全力を使っているため、家事などを行っている余裕はないという実情のこと。
- ④ 自分の文章は明確な作法に則って書かれているわけではなく、ただ懸命に書かれたものだという実情のこと。

現代の国語、言語文化

問五

傍線部D「これは私が云うまでもないことであろう」とあるが、なぜそのように言えるのか。その理由としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 38 にマークしなさい。

- ① 海外作品を翻訳で読む自分が、本当のものを理解しているとは言えないから。
- ② 自分はドストエフスキーなどのように豊富でないと自覚しているから。
- ③ チェホフのように深く澄んだものを自分が書くのは望み得ないことだから。
- ④ 自分が書いた文章のうちに、自分がどのような人間が表れるから。

問六

傍線部E「おそろしい気もしてくる」とあるが、それはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 39 にマークしなさい。

- ① 外国語の作品について、翻訳を通して真に理解することは不可能だと思われるから。
- ② 自分の文章は、それを読む人によってさまざまに解釈されているかもしれないから。
- ③ 自分はすべてをさらしているつもりでも、読者はそう思っていない可能性もあるから。
- ④ 作品を書いた意図について、読者が理解しようとしてくれるかはわからないから。

問七

傍線部F「書いた本人がびっくりした」とあるが、それはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 40 にマークしなさい。

- ① 文章や構成に関して、自分が書いた時には意識していなかった意図について、授業で説明されていたから。
- ② 授業での作品に関する作者の意図の説明は的を射ていて、自分も今後に生かすべき点が多く見られたから。
- ③ 作家というものは、文章を書くときにそれほど計算をしているわけではないことが、授業では説明されていなかったから。
- ④ 授業では作者である自分の意図とは異なることが教えられており、それを指摘したほうがよいのではないかと思ったから。

現代の国語、言語文化

問八

傍線部 G 「書く人間を神秘的に祭り上げでもする」とは、どのようなことか。もつとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 41 にマークしなさい。

- ① 作家の中でも夢中で作品を書くような作家こそ、真の作家であるとみなすこと。
- ② 作家は普通の人と違って、文章の書き方や構成を学ぶべきではないとすること。
- ③ 作家は何も考えていなくても、自然と作品を書き上げているものだとすること。
- ④ 作家の文章や構成の意図を、普通の人が説明することなどできないとすること。

問九

傍線部 H 「文章が優先するなどということもない」とは、どのようなことか。もつとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 42 にマークしなさい。

- ① 人間性に深みがないのに、豊富な、あるいは深みのある文章が書けるということ。
- ② 書こうとしている思いがまず先にあって、そこから文章が出てくるということ。
- ③ 文章が深いかどうかよりも、人間性が深いかどうかのほうが重要だということ。
- ④ 文章を書き直すことによって、考えていることを再発見できるということ。

問十

傍線部 I 「それが、文章を書いてゆく張合いである」とは、どのようなことか。もつとも適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、解答記入欄 43 にマークしなさい。

- ① 文章を書きながら自分のうちにあった思いを修正していった結果できた文章によって、自分の人間性がわかってくるということに、文章を書くことの意義を感じるということ。
- ② 当初書こうとしていたものが、文章を書いていくうちに変わっていき、その結果自分の人間性がよりわからなくなっていくことに、文章を書くことの醍醐味だいくみがあるということ。
- ③ 書きながら考えることで自分の浅さに気づくことにはなるが、それでも自分の思いに取っ組み合ってゆくしかないということに、文章を書くことへの不安を感じるということ。

- ④ 自分の書いた文章によってさらされることになる自分という人間を、それを読んだ人がどのように受け取るかわからないところに、文章を書くことの面白みがあるということ。

現代の国語、言語文化

問十一

問題文の内容に合致するものを、次の①～⑥の中から二つ選び、解答記入欄

45

にマークしなさい。

44

- ① どのような人でも、その人の文章にはその人の個性が強く出ているものである。
- ② 「私」は自分の書いた文章が、誰かに笑われることを承知の上で文章を書いている。
- ③ 小説をどのように読むべきかを学ぶことで、小説の書き方もわかってくるものである。
- ④ 書こうと思うものがあるなら、最後がわからずに書き出すということはないはずである。
- ⑤ 文章だけでなく、文章の書き方もまた、「私」という人間をあらわしていると言える。
- ⑥ 書きながら考えることは、書こうとしているものとしての自分と取っ組むことである。